九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二次元性愛の抹消と抵抗可能性に関する社会学的研究

松浦，優

https://hdl.handle.net/2324/7182279

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式８）

氏　　名　：松浦優

論文題名　：二次元性愛の抹消と抵抗可能性に関する社会学的研究

区　　分　：甲

博　士　論　文　の　要　約

本研究は、マンガやアニメなどのいわゆる「二次元」の性的創作物を愛好するセクシュアリティについて、社会学およびクィア・スタディーズの観点から考察するものである。具体的には、①上記のセクシュアリティがどのようにして人間へ性的に惹かれることや人間との性行為を欲望することとは異なる独自のセクシュアリティとして成立可能であるのか、②こうしたセクシュアリティがどのようにして周縁化されたり不可視化されたりするのか、③周縁化に対してどのように抵抗しうるのか、ということ考察した

第 1 章では、こうしたセクシュアリティの周縁化を捉えるための概念として、「対人性愛中心主義」を検討した。とくに、従来のクィア・スタディーズで検討されてきた「異性愛規範」や「強制的性愛」などの概念と対人性愛中心主義の関係を検討することによって、本研究のクィア・スタディーズにおける位置づけを示した。考察を通して、対人性愛中心主義はジュディス・バトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」を構成する要素であり、性別二元論とあわせて異性愛規範の構成要素であるということを明らかにした。またインタビュー調査の語りを通じて、対人性愛中心主義が社会において均質に影響力を持っているわけではないこと、たとえば「オタク」集団において「恋愛への社会化」が相対的に希薄な場合があることや、男性と比べると女性のほうが他者から性的・恋愛的なアプローチをかけられやすいことを確認した。

第 2 章前半での問いは、マンガやアニメなどを指す「二次元」とはそもそも何なのかである。カレン・バラッドのポストヒューマン的パフォーマティビティ論と、フィリップ・デスコラの存在論的人類学に依拠しつつ、「オタク」論やマンガ表現論を批判的に検討する作業を通して、二次元とは何かを明らかにした。二次元キャラクターとは、模倣的共感によって情報集積をアニメートすることを通してキャラクター化され、記号そのものが肉体であるようなものとして物質化されるキャラクターである。キャラクターが二次元のものとして物質化されることが可能となるのは、記号に物質的側面（エクリチュール）が伴っているからである。それゆえ二次元なるものの成立は、物質という人間以外のエイジェンシーがもたらす誤配だと言える。以上の理論は、絵だけでなく音声なども二次元となることを説明できる。また、非‐人間のエイジェンシーがもたらす物質的な誤配が、バトラー的なパフォーマティビティとは異なる仕方でクィアな攪乱を引き起こしうることを示唆した。

これを踏まえて第 2 章後半では、対人性愛に還元されない「二次元」へのセクシュアリティが存在可能であることと、そのようなセクシュアリティがいかに社会で不可視化されるのかということを、ともに説明できる理論を提示した。言い換えれば、この章は、第 2 章前半で示した理論をジュディス・バトラーのクィア理論と比較することによって、二次元に関するクィア理論を提示するものである。まず、先行研究で対人性愛が自明化されてきたことを批判したうえで、「二次元」への欲

望を「人工環境と化した情報集積にもとづいて制作された人工物」への欲望として定式化した。次に、性別二元論と対人性愛中心主義を批判する理論を東浩紀による否定神学批判から引き出したうえで、現実社会における規則や規範の再生産を空転させる「アニメーション的な誤配による攪乱」を理論化した。あわせて、こうした誤配は認知言語学における「メトニミーからのメタファー」になぞらえて説明できることを示した。最後に、こうした非対人性愛的なセクシュアリティが、抑圧や禁止とは異なる「ただ意味を失う」という仕方で巧妙に抹消されることを、バトラーとウィニコットに依拠しつつ論じた。

第 3 章では、前章で論じた抹消概念を、現象学的社会学に依拠することで精緻化した。まず「類型化されていないこと」に関するシュッツの記述をもとに、類型化されていないものが類型化されないままとなる現象を「非類型化」と概念化したうえで、抹消を「非類型化をともなう周縁化」と定義した。次に、レリヴァンス体系の相応性の理念化と、主題的レリヴァンスの消滅に関するシュッツの記述から、抹消を維持するレリヴァンスの問題について論じた。そして抹消において「主観的意味連関の否定」が生じることと、その際の周縁化が間接的なものであるということを指摘した。

第 4 章では、抹消の具体的な事例として、架空のキャラクターへの性的惹かれを表す「フィクトセクシュアル」という言葉に関するウェブ投稿を分析した。分析を通して、フィクトセクシュアルというカテゴリーが可能にする実践と、フィクトセクシュアルを抹消する解釈図式を説明した。フィクトセクシュアル当事者の投稿からは、性的マジョリティを名指す概念として「対人性愛」という造語を用いることで、性的表現を愛好する立場から強制的性愛や恋愛伴侶規範を批判するという言説が見られた。他方、フィクトセクシュアル・カテゴリーの正当性を疑問視する言説では、性的・恋愛的な対人関係に関わる生得的な「性的指向」ではないという理由が持ち出されていた。さらに、フィクトセクシュアルを「オタク」あるいは「恋愛」という枠組みに回収することによって、性に関する従来の解釈図式を維持する、という「マジョリティへの回収による抹消」が確認された。

第 5 章では、リスク社会論における道徳に関する考察をもとに、抹消という一見すると軽微に思われるかもしれないタイプの周縁化が、ミクロな日常的相互行為過程だけでなく、マクロなレベルでも生じうることを論じた。具体的には、二次元の未成年キャラクターを性的に描いた創作物を「児童ポルノ」とみなす法規制や非難を取り上げ、そこで対人性愛中心主義的な価値判断が暗に持ち込まれていることを明らかにした。

第 6 章では、これまでに論じたような抹消を把握・批判するためにどのような方針が必要となるかを考察した。まず、スチュアート・ホールとクロード・シャノンのモデルを検討することで、二次元なるものが成立する誤配をメディア論的に説明した。次に、対人性愛中心主義批判におけるアセクシュアルとの共鳴や、二次元コンテンツを「児童ポルノ」と扱おうとする法改正への対抗における「オタク」との共鳴について、アイデンティティ・ポリティクスとは異なる仕方での物質を介した「連帯」と位置づけた。抹消に対する抵抗は、特定のアイデンティティ・カテゴリーを顕在化させる実践だけでない。モノとの関係のなかから、既存の解釈図式に修正をせまるような営為が生起する現象もある。それゆえ、意味連関や「強い」主体をめぐる議論を、非意味的で物質的な連関へと開くことが重要だと論じた。

以上の研究は、ジェンダーとセクシュアリティの動的な関係を適切に捉えるための理論を提示するものであり、とりわけ人工物へのジェンダー帰属やポルノグラフィをめぐるフェミニズムの理論に再考を促すものである。また本研究は、これまで一般的に差別と呼ばれてきたものとは異なるタイプの周縁化があることを示し、それを抹消として明示化することによって、社会学的な差別研究を精緻化したと言える。最後に本研究は、能動的オーディエンス論では説明できないタイプの、物質的なエイジェンシーを組み込んだ誤配の可能性を示唆した。